

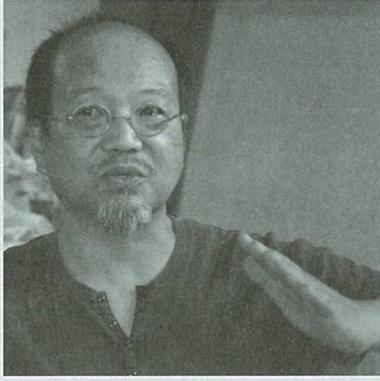
和紙

だより

■目次

越前和紙への提言 金刺潤平さん	1
活動紹介 折形デザイン研究所	2
取組紹介 イサムの漉き織	3
和紙ミニコナー	4
情報欄	4

越前和紙への提言



■金刺 潤平(かなざし じゅんぺい)
(株)水俣浮浪雲工房代表取締役。静岡県沼津生まれ。1983年、上智大学理工学部卒業と同時に「日本青年奉仕協会」の1年間派遣ボランティアとして水俣へ赴く。84年、胎児性水俣病患者らと手漉き和紙と織物の工房「水俣浮浪雲工房」を開設。93年、イグサの製紙原料化に成功し特許取得。その後和紙の技術を携え、インドネシア、バリ島、ドイツ、ブラジル、アマゾンなど世界各国で支援事業に参加。02年無廃棄物イグサパルプの開発で特許を取得。07年「第2回ものづくり日本大賞」優秀賞受賞。10年「サマルカンドペーパー」の復元に成功。また、経済産業省「地域資源活用事業」認定を受け、熊本県伝統工芸師として指定される。環境NPO「植物資源の力」代表。
<http://haguregumo-kobo.com/>

■金刺潤平さん
(手漉き和紙工房主宰・紙支援者)
「地域の持続可能性に貢献する和紙技術」

●水俣から始まった

大学では燃焼現象論を学びました。単位時間、単位体積あたりの発生熱量を最大限に上げるためにはどうしたらいいかという科学です。卒業生は引く手あまたで、日立、三菱重工、川崎重工などのいわゆる重厚長大産業の技術部や研究所などに就職します。しかし、僕はこの学問が、地球温暖化やエントロピーの増大に加担しているように思え(笑)、納得がいかないと教授にも話していた。今にもやめそうな僕に、教授は卒業だけはしなさいと諭してくれた。たまたま学内のポスターで一年間の派遣ボランティア制度を知り、水俣に来ることになった。

本来障害者の問題は本人も頑張らないとなかなかうまく回つていかなないので、その当時、被害者は何かしてもらおう存在で、胎児性患者達は毎日膝小僧抱えて家の隅にいるだけという状態だった。彼らに何か一緒にやろうかと声を掛けたら、



胎児性水俣病患者と紙作りを始めた頃

「やりたい！やりたい！」と言う。いつかは帰ってしまうただの通過者になることにも実は引つかかっていたので、やれることを模索していたら、石牟礼道子さんが、「和紙だったら、工程が沢山あり、やれることが見つかるかもしれない。そうしたら私も応援する」と言ってくれ

珍しい素材も置いてある工房



た。そして、彼女の知り合いのお寺の散華を素人芸の溜め漉きで作ったのが和紙との出会いでした。その後八代の宮地和紙の宮田寛さん、八女和紙の松尾茂幸さんに紙作りを習ったのですが、ある研修会で出会った柳橋真先生に「こんな紙ではダメだ、四国へ行つて勉強してこい」と言われ、高知県立紙産業技術センターの大川昭典さんに付いた。ここで繊維を扱うことの面白さを教えられ、本格的に紙を生業にしようという気持ちが固まったのです。

●あらゆる素材を活かす姿勢

水上勉さんの小説「海の牙」は、水俣をモデルにした彼の出世作ですが、ある記念講演の折、先生をエスコートする役を仰せつかりました。ちようど、いい紙を作ろうと頑張っていた時だったので、うちの工房に立ち寄って頂いた時に、漉いた雁皮紙をプレゼントしたのです。最初は褒めて下さったのですが、「いい材料からいい紙が出来るのは当たり前。お前達も胎児性の子達にしても、社会から相手にされてないだろう。そのお前達には、人間世界で相手にされず、道端にうち捨てられている雑草の声が耳に届かないのか。人間がいらないと言っているものに魂を吹き込むことが、人の仕事ではないのか」と実に文学的な言葉で諭されたのです(笑)。結局、先生は竹紙を作らないかと言いたかったらしいのですが…(笑)

先生から言われたことは、僕の紙作りの姿勢に次第に根を下ろし、植物を始め、捨てられていく素材を活かすことにこだわりました。



◀工房作品
和紙とコーヒーの豆カスを使った壁画

様々な材料で漉いた壁画

ど、いろんなものが工房に持ち込まれました。特に力を入れたのが、イグサの破砕体を入れた壁紙「アイビウオール」の開発で、二〇〇二年に特許を取り、「ものづくり日本大賞」で優秀賞を受賞しました。学校、エコマンション、病院、老人ホームなどに採用されています。漉き込んだイグサの星状細胞は水分を含んだり出したりすることですぐれた調湿効果があり、夏は涼しいという感想をいただいています。

●海外協力とサマルカンドペーパー

こんな珍しい材料で紙が作れると、何やかやとワークショップを頼まれ、それが海外協力の依頼にまで広がっていきました。現在本業の紙作り以外の仕事は、NPO「植物資源の力」で行っています。砂漠化を抑えながら、地域の仕事を作っていくというJICAのアマゾンのプロジェクトは十年間続きました。アマゾンの表土はわずか五センチしかない。それを熱帯樹木の板状の板根が表土の流出を防いでいるのですが、道路が通

ると急激に砂漠化するのです。そこに、イン
ディオが紐作りを用いていたクラワという植物
を植えると育つ。そ
の後混植栽培で、間
に別の植物を植え
ていくと復活して
くれる。クラワの
葉っぱの繊維を利
用した紙作りを教
え、「アマゾン・ペー
パー」として売って
います。

復元したサマルカンドペーパーを
現地の人に指導



サマルカンドペーパー
工芸品

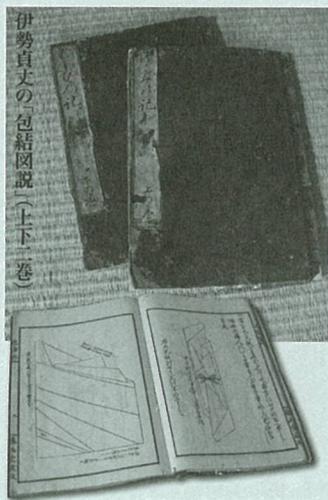
シス都市、サマルカンドには十九世紀の終わり
まで「サマルカンド・ペーパー」という紙があり
文化的にも重要な紙でした。中国から伝播し
てきた紙は、東洋では筆を使うので表面がデコ
ボコ、ザラザラしていても問題ない。西洋はペン
書きなので、表面を硬い石で磨いてペンが引つ
かからないよう平滑にし、裏写りしないように
しなくてはなりません。そういった書写方法の
文化の違いがここでぶつかり、そのことによつ
てペンでも書ける洋紙の原型がここサマルカン
ドで生まれたのです。この紙は打紙をした後、
動物の牙や宝石で磨いたらしいのですが、余り
詳細が分からないにも拘わらず、有名で、ユネ
スコの世界文化遺産都市の手工芸品の目玉に
復興しようということになり、その指導に行っ
ています。

■折形デザイン研究所
「デザイン志向で折形を捉え、よき使い手を
育てる」

東京・南青山の、元、桶職人の工房だったとい
う木造建築に「折形デザイン研究所」を訪ねた。
当研究所は、伝統的な「折形」をモダンデザイ
ンの観点から捉えなおし、現代の暮らしへ取り
入れることを目指して、二〇〇二年に発足。折
形教室を始め、展覧会、本の出版、手漉き和紙
職人とのオリジナル商品の開発など、さまざま
な活動を通して、折形の美と精神を伝えて
いる。代表の山口信博さんにお話を伺う。

●折形にデザイン心を刺激される

山口さんは、グラフィックデザイナーとして
PR会社勤務を経て、一九七九年に山口デザイ
ン事務所を設立。俳句同人誌のデザインを手
掛けていた時、江戸期の資料を探しに、神保町
のとある書店で偶然、伊勢貞丈の「包之記」を
手にした。江戸中期に出版された、贈答の際の
包みと結びの礼法を著した伊勢貞丈の「包之
記」「結之記」は「包結図説（上下二巻）」と呼
ばれ、折形のバイブルとも言える本だ。手に入れ
た美しい図版本に変体仮名で書かれてある内
容が知りたくて、ある折形研究家の門を叩き、
爾来三年間、その先生の折形教室に通い続



伊勢貞丈の「包結図説（上下二巻）」



代表の山口信博氏

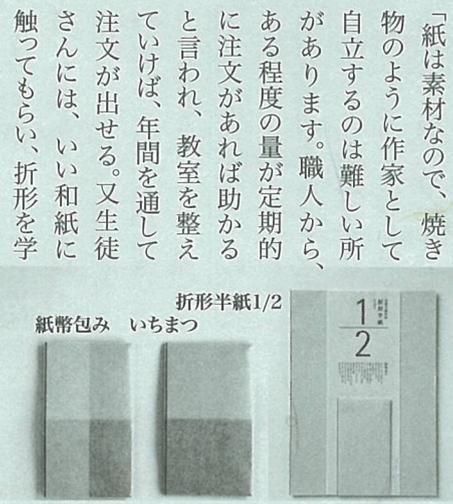
「先生は、私達のクラスの人が普通の人と
ちよつと違うメモの取り方や変な質問をする
ので、面白がつてくれて、沢山の資料を提供し
て下さいました。」習ったものを全て和綴じに
して提出し、初級終了となるが、貞丈が示した
伝統折りの中には、今はもうすたれてしまつた
物を包む型もある。例えば、「渡し金包み」は、
お歯黒塗（だま）の上に渡しかけて、お歯黒の道具を
乗せるために用いた真鍮の板で、かつては贈答
品のひとつだった。「伝統の折形の原則をきち
んと踏まえた上で、もつと現代生活に密着し
た折形を考えられないだろうか」と自主勉強会
をやり、新しい折形の試作を先生にも見て頂
いていました。残念なことに、その年に先生が
お亡くなりになりました。」

●「礼のかたち」展と和紙職人との交流

二〇〇二年の年末年始、新宿、リビングデザイ
ンセンター・オゾンで、折形の展覧会「礼のかち
ち」展開催。デザイナーを始め、編集者、プラン
ナー、画廊経営者などに注目を浴び、折形デ
ザイン研究所の原点となる。展覧会に合わせ
て制作した小冊子は、折り方を示すハウツー
本ではなく、四季折々十二月に、様々な相手
に何かを贈ることを想定し、友人の俳人の文
章と俳句を添えた。当時、この遊び心あふれる
趣向の小冊子を何冊か買い求め、友人にプレ
ゼントする人も多かったそうだ。

同会場では美濃の若い職人さんとも知り合っ
た。当時、東京の和紙店を巡っても、折形に向
いている紙が必ずしもあるわけではなかった。

職人との交流が始まり、その後、行政の支援を
受け一緒に紙の開発をするプロジェクトが決
まつた。六本木のアクシスで発表展示を行い、
折形教室も始め、教室で使う楮紙「折形半紙
1/2」を皮切りに、折形半紙のセットや紙幣
包みキットなどを開発していった。



「紙は素材なので、焼き
物のように作家として
自立するのは難しい所
があります。職人から、
ある程度の量が定期的
に注文があれば助かる
と言われ、教室を整え
ていけば、年間を通して
注文が出せる。又生徒
さんには、いい和紙に
触ってもらい、折形を学
んでいただいて、生活の中で使ってもらえれば、
和紙の消費にも繋がる。よき作り手は、よき使
い手がいれば成り立つと考えるようになりま
した。」

●折形で広がるデザインの世界

現在、「折形教室」は、基礎・応用の二コース。
具体的な物を包むことから始め、歳時にちな



んだ贈答包みや俳句鑑賞などの文化的背景も学ぶ。折形をデザインの意味論的視点で読み解き・工夫する造形訓練や創作折形の他、紙にまつわるデザインの歴史や理について研究するという知的刺激に満ちた講座も設けている。その他にも、折形と関係の深い「結びの講座」「室礼の講座」「着付けの講座」がある。入会金五千円、受講料は月一回、半期一クールで三万円（材料費別）。折形にまつわる講演会、研究会や様々な企画なども行う。本・小冊子も現在までに八冊発行した。



新・包結図説

折形に関わることで、デザインの仕事も興味深い広がりを見せている。二〇二二年から、川越氷川神社の顧問として、神社付随の結婚式場で使われるオリジナル紙グッズ、会館カフェのコンセプト作りやメニューの開発、パッケージデザインなどを手掛けている。おまけに昨年、神職の資格も取得した。

「折形は、一枚の紙を折り、畳み、包み、贈る。受け手はそれを解くことで元の一枚の紙に戻る。この往來の際の紙の変容は、吐く息と吸う息のような、行きつ戻りつの二種の生命現象と捉えることが出来ます。言葉は介していないけれど、和紙を介して、人は深いコミュニケーション「生命現象を折り込んでいる。興味は尽きません。」



川越氷川神社まもり結び

取組紹介

■イサムの漉き織

和紙と繊維の独自技術をコラボで

越前は、昔から襖紙の大生産地として知られている。一九五三年創業の「椿原織物」は、レーヨン、麻、先染糸を素材とする襖地、クロス地を長年製造してきた。同社は、二〇〇三年、地場の紙漉き技術と培ってきた織物技術を組み合わせ、和紙で様々な模様を漉き込むことのできる、透ける布「漉き織」を開発。三代目社長の椿原勇氏は、平成二四年、同織物退社を機に、この「漉き織」を本格的に事業化しようと、新会社「イサムの漉き織」を立ち上げた。

●漉き織とは

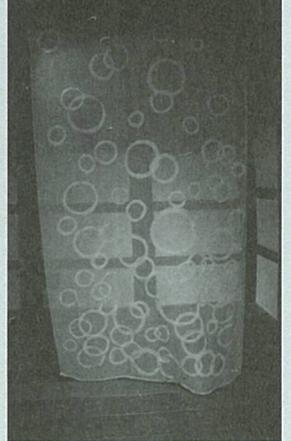
襖紙に布を貼る技術は、元々紙の強度を上げるというニーズのために考案されたものだが、素材に使う繊維は、襖に張って伸び縮みやそりが生じないように独自に開発されたものだ。漉き織の繊維生地には、椿原織物の技術・和紙になじみやすいパルプを原料としたスフ糸の極細レーヨン100%が使用されている。ガーゼ状の薄い布のため、模様を描く紙料をかけると、水が抜けやすく、布を挟むようにして紙が付着する。乾燥させれば、ネリだけで布にしつかりくつくつというから驚きだ。和紙の原料は楮生地の素材も自然素材で、化学接着剤なしのネリだけで漉き込むので、環境にも人にもやさしい。

生地に紙料で模様を付けるのは、地元製の紙



社長の椿原勇氏

風をうけふわーっとゆれるタピストリー



会社二社が受け持つ。透ける布に、アーティスティックな図柄を付けるのは長田製紙所。結婚衣装に使う落水模様の漉き織生地は、手漉き紙をエンドレスに製造できる技を持つ山次製紙所。和紙産地ならではのコラボレーションだ。

●展開

開発当初は、主にタピストリー、間仕切りなどのインテリア素材として展開。二〇〇四年、インテリアの国際展示会IPEECに出品し、二〇〇五年には、インテリアデザイナー協会奨励賞を受賞した。

「会場では小さな送風機を当てて、透け感のある漉き織という素材の軽やかさをアピールしてみましたが、紙だったら動かないが、ちよつとした風でふわーっと動く空間演出素材として美しい、と評価されたようです。」と勇社長は語る。その後、親戚の福井県の大手入れ井県の大手入れタル衣装店に、和紙を使用した結婚衣装「越前和紙之無垢」を提案。新郎新婦が二人で漉いた漉



白無垢とウエディングドレス

紙を使用した結婚衣装「越前和紙之無垢」を提案。新郎新婦が二人で漉いた漉

き織素材の綿帽子を作り、和紙衣装は仕立ててもらおう。費用は仕立込み、一着買い取りで十五万円程。一生の思い出になり、お値段もお手頃と、現在までに十組のカップルが利用した。二〇二四年春には、県の販路開拓の補助金を利用してウェブサイトやパンフレットを整備すると共に、ドイツ、デュッセルドルフで、展示会を開催。現地在住の勇氏の娘さんの助力もあり、日本人フラワーアーティストのギャラリー「Yamamoto Floral Lifestyle」で、生花などをあしらったランプシェードやタピストリー、和紙の白無垢などを展示した。会場には多くの人が訪れ、日本独自の漉き織の技術と美しさに驚いたという。来年一月にはフランスでの展示会も予定されている。



ドイツでも好評の生花をあしらったランプシェード

ドイツでの展示会の様子

●産地の利を活かし、将来に繋がれば

用途開発はこれからの課題で、ファッション分野では、白無垢などの衣服の他、漉き織で作ったコサージュやストールなども試作している。また、ガラスで挟んだ漉き織は、今庄の小学校や京都高島屋のパウダールームなどに間仕切りとして採用されているが、これから力を入れたいのは、特注品や小ロットのものだという。

製品として出来上がってしまったものとは違い、ランプシェードにしても、地の色も模様を付ける紙の色、柄、グラデーションなどいかにようにも作れるので、四季のしつらえやオリジナルロゴ入りのものにも対応できる。舞台装置などに使えば、比較的安く、軽く丈夫な演出道具として利用できる。勿論、ディスプレイや旅館や店舗の照明器具や演出にも使えそう。



卯立の工芸館で開催された「イサムの漉き織展」

六月から、越前市「卯立の工芸館」で始まった二回目の「イサムの漉き織展」では、鯖江のメガネフレームの廃材を利用して作品を作るアーティスト増永憲治さんとのコラボが実現した。会場にはチタンフレームの廃材を利用したランプシェードや仏像を形どったオブジェの他、切り花をあしらった照明器具、白無垢結婚式衣装、ウエディングドレス、羽織、コサージュ、タピストリーなどが展示された。「リタイアして始めた事業なので、余り積極的に営業しているとは言えないかもしれませんが、思いがけない人から人への繋がりのお陰で、商業ベースで広がってきたのは有り難いことです。産地の技術集積を活かし、少しずつでも将来に繋がれば良いと思っています。」と勇社長は語った。

■漫画家 井上雄彦氏、世界最大級の手漉き和紙にガウディを描く

「スラムダンク」や「バガボンド」などの作品で知られる人気漫画家、井上雄彦（たけひこ）さんが、日本スペイン交流四百年を記念する特別展「ガウディ×井上雄彦」シンクロする創造の源泉（七月十二日～九月七日、於：東京、森アーツセンターギャラリー、ほか金沢、長崎、神戸、仙台上巡回）の作品制作に、世界最大の手漉き越前和紙を使用する。

五月二十三日、井上さんは、越前市の上山製紙所に赴き、ギネスにも登録された「IMADATE平成大紙」（一九八九年）を上回る、縦三・三m×幅十・七mにおよぶ「平成長尺大紙」の紙漉きに職人ら総勢二十人と挑戦。紙漉き唄に合わせて、かけ声で意気を含みながら、重い簀の上で紙料の「すくい」と「かえし」を約二十分くり返し、楮紙「平成長尺大紙」を完成させた。

出来上がった和紙は乾燥の後、東京のアトリエに移され、ガウディの生涯をテーマにした作品を筆で描く。スペインから出品される貴重な資料約百点と、井上さんの合計四十点の描き下ろし作品が並ぶ展覧会は、壮大なガウディ賛歌となる予定だ。井上さんは「この紙と対話しながら、ガウディの世界観の表現に打ち込んでみたい」と語った。



本展覧会の公式ウェブサイト
<http://www.gaudinoue.com/>

情報欄

●イベント情報

■第6回越前和紙七夕吹き流しコンテスト作品展

時：平成26年7月12日（土）～7月27日（日）

場所：越前市いまだて芸術館

■荒井恵子の世界-挿絵「空と宙」ひろがり、つながる

時：7月19日（土）～8月31日（日）

場所：卯立の工芸館

■和紙の魅力 対談 荒井恵子×3代目岩野平三郎

時：7月19日 10:30～12:00

場所：卯立の工芸館

■荒井恵子氏による「墨のにじみ」ワークショップ

時：8月23日（土）

場所：パピルス館

■越前市小学校卒業証書漉き

時：7月17日（木）～8月28日（木）

場所：パピルス館（協力：越前和紙伝統工芸士会）

■河灌さんまつり

時：8月2日（土）

場所：和紙の里通り

■おもしろフェスタ2014

時：8月9日（土）～10日（日）

場所：サンドーム福井（越前市）

体験

■福井県伝統工芸士会連合会展2014

時：8月15日（金）～8月27日（水）

場所：伝統工芸青山スクエア（東京）

展示・販売あり

■越前モノづくりフェスタ2014

時：9月13日（土）～15日（月）

場所：サンドーム福井

体験・販売あり

■ツーリズムEXPOジャパン

時：9月25日（木）～9月28日（日）

場所：東京ビックサイト

体験・販売あり

【和紙文化in越前】のお知らせ

例年、秋に開催されている和紙文化研究会の和紙文化講演会が、東京を飛び出し、2014年11月24日（月）～25日（火）、越前和紙関係者との共同企画で行われます。企画は3本柱。

①11/24：第22回和紙文化講演会

テーマ：「越前和紙の伝統と創造の世界」

②11/25：産地見学会

〈地図を参考に各々が自由に和紙工房を見学できる画期的な試み〉

③11/15～12/15：展覧会

テーマ：「Echizen和紙を創作する」

※詳細・申込方法は、

<http://washiken.sakura.ne.jp/admission/>

編集後記

水俣の金刺さんは、まだ研究されているわけではないが、日本への紙の伝播経路は少なくとも数本あったのではと言う。近くの海には唐船岩という名の岩があるし、山手の佐敷城では雲南の焼き物が出る。芦北という町に残る紙漉き道具はヴェトナムのものと同じく「天」がなかったという。興味深い話だ。（よ）

※前号春号の「紙守」活動紹介の記事で、渡邊明義氏と北見音丸氏の写真が入れ替わっておりました。お詫びして訂正致します。

季刊・和紙だより 第43号（2014年夏号） 発行日：2014年7月15日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人：福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所：Office YOMOSA 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。